

二回目の「大学入学共通テスト」 試行調査について

豊田 基裕

はじめに

大学入試センター試験は今年で三〇回目の実施^①となった。

「平成」最後となった「日本史B」の試験では、初めて平成年間（一九九〇年代）の出来事を問う出題があったほか、年号（元号）を素材として中世の政治と社会を問う出題も見られ、今年五月から新元号となる動きを反映しているとして話題になった。来年一月が最後の実施となる。

一方、それを引き継ぐ「大学入学共通テスト」に向けて、昨年十一月、二回目^②の試行調査（以下、プレテスト）が行われた。一昨年の一回目^③を踏まえながら、新学習指導要領で重視されている思考力・判断力を評価するため、多様な史資料の活用や設問形式、場面設定等が見られた。昨年末に正答率が公表され、日本史Bは五三・五八%で、大学入試センターが目標としてい

た正答率五割程度に達していた。

プレテストの設問条件や設問文には、これから生徒に求められる力や、そのための学習活動や指導方法の方向性についての具体的な示唆を見て取ることができる。ここでは、プレテストの分析を通して、それらのメッセージを読み解いていきたい。

〔プレテストのねらい〕

大学入試センターでは、昨年六月にプレテストの趣旨について明示している。歴史（世界史Bと日本史B）については、「歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視し」、「用語に関する知識ではなく、事象の意味や意義、特色や相互の関連等に関する理解」を求め、「教科書等で扱われていない初見の資料についても、そこから得られた情報と授業で学んだ知識を活用しながら、仮説を立てたり、歴史的事象の展開を考察したりすることができかどうかを問う問題や、時代や地域によらず「歴史の見方」のようなテーマを設定した問題、時間軸を長く取った時代を貫く問題など」も含む、とされている。

〔出題の特徴〕

第一問がテーマ史、第二問が古代、第三問が中世、第四問が近世、第五・六問が近現代という分野で全六大問三六小問の構成は、現行のセンター試験と同様だった。また、第一問の間三、

第三問の問三(二)、第四問の問二(二)、第五問の問一、第六問の問一のように、従来のセンター試験でも見られた主に知識を問う設問形式もあった。しかし、精読が求められる史資料が増加していることや、より深い思考力・判断力を求める多様で複雑な設問形式が出題されることから、センター試験と比べて短時間で題意を的確に捉え処理する力が問われている。

それでは、各大問の中で特徴的な設問を抽出し分析している。

第一問

「開発と人々との関係史」「災害と人々との関係史」という二つの主題で同時代を捉える出題だった。このテーマには、東日本大震災のほか、プレテストが実施された平成三〇年(二〇一八)の世相を表す漢字が「災」だったように日本各地で大災害が発生したことが反映された。

問三は、問題自体は戦国大名の領国振興策に関する知識理解を問う内容だが、カードにまとめたものをクラスの生徒に提示し意見を求め探究を進めるという学習過程が想定されていることに注目しておきたい。

問四は、現行の学習指導要領の「歴史の考察」を踏まえた出題で、津波碑文に彫られている二つの史料の共通点を考察する。

問五は、足尾銅山の近代化に関して立場の異なる史料(『古河市兵衛翁伝』と『田中正造全集』)とグラフ(近代日本の銅の生産と輸出)から読み取れた情報をまとめるという学習の場面から、歴史的事象の見方の多様性を問うている。

問六は、開発・災害に対する政府の対応の推移について、時代ごとの特徴を説明した五文を年代整序する出題である。「中央政府の機能が弱く、在地の力で自ら救済することが原則であった。」や「法律が整備され、大規模工事の際には影響を事前評価する仕組みができた。」という、他の三文と比べて少々時代を特定しづらい選択肢があったせいも、正答率がこの大問の中で最も低かった。なお、設問文は協働的な学びをきっかけに主題についてさらに考察を深め新たな気づきを得るという学習場面が想定されており、探究学習の在り方を示唆している。

第二問

古代の官道制度をテーマに、一回目のプレテストでは見られなかった地図を含め、多様な史資料を利用しその読解を求める出題で、正答率からは全大問の中で最も難度が高かったといえる。

問一は、古代の官道に関する写真(曲金北遺跡の道路遺構)とその周辺の地図から読み取れる情報に対して、その背景や理

由を考察させる。センター試験においても視覚資料を読み解く出題は散見するが、ここではさらに進んだ出題形式となっている。

問二(二)は、播磨国の小犬丸遺跡の変遷を示した表と八〇六年に出された勅の史料(『日本後記』)から、官道制度の衰退した背景を正誤判定する出題。

問三は、地図から読み取れる情報の正誤を判定した上で、正しいと判断した情報と適合する歴史的事実を判別する複合型の組合せ問題で、正答率は全設問の中で最低だった。地図を反転させて中央政府の東北経営を蝦夷の視点で捉える設定は新しく、歴史的事象を多面的・多角的に考察する力を養う上での教材提示としても留意したい。

問四は、古代から近世に道路に設けられた関(関所)についての三つの史料と、そこから読み取れる関の機能の説明文を組合せた上で、それらの年代を整理する複合型の設問。

第三問

生徒が書いたレポートの要旨をリード文として、中世における外的影響と社会の変化を捉える出題だった。

問一は、一見、センター試験でも見られる出題形式で四つの写真から設問の条件に適合するものを選択する問題であるが、

何であるかという知識よりも、「外からの波」を説明するという目的に応じた情報を読み取る力を求めている。

問二は生徒のレポートに対する反論の成否を判別する。問三(二)は対外から国内に視点を変えて一三〜一四世紀の商業と交通について書かれた史料(『庭訓往来』)から読み取れない内容を選択する。問四は一五世紀に対する異なる二つの評価の根拠を組み合わせる。これらは、歴史の展開に関わる事象の意味や意義を多面的・多角的に考察することを重視した、センター試験には見られなかった新しい手法の設問である。教材提示や生徒の活動の点からも留意したい。

第四問

近世の文書や絵図など、資料が作成された目的や歴史的背景を問う出題だった。

問一は、幕府が代官に示した法令と百姓が名主を訴えた訴状の史料読解が求められているが、日本史の知識というより、誰が誰にどうしたかという文章の精読や情報分析の力を問う設問といえる。その一方で問二(二)は読解といっても、俳句が語る社会の世相に着目して、小林一茶の二句の歴史的な背景を考察する設問であった。

問四は、近世の幕府の公文書管理に関して萩生徂徠が述べた

意見（『政談』）の史料読解と、その史料と関係がある政策（足高の制）を選択する組合せ問題。

第五問

近代日本の経済・国際関係について、Aは一八八〇年代前後の経済状況、Bはビゴーの風刺画をもとに日清戦争後の世界と日本、を問う出題だった。Aには、生徒が松方財政の背景から影響までを整理した想定のプローチャートが示されている。生徒に学習内容を表現させたり発表させたりする手法として有用である。

問二は、松方デフレの長期化が人々の生活に及ぼした大きな影響を示すデータとして適当でないものを選択する設問。グラフを用いた設問ではあったが、既習の知識からグラフを精査せずともデフレの影響と「小作地」「破産者」「農民騷擾」とを結び付けることができた。

問三は、企業勃興期の三重紡績会社と日本鉄道会社の営業状況を示した史料読解の設問だが、第四問の問一と同様、日本史の知識というより国語的な読解力を問う設問といえる。

問四は、リード文で示された風刺画とそれを説明したメモから情報を読み解き、同じテーマで描かれた風刺画を選択する設問。当時を物語る視覚資料として授業で多用される風刺画だが、

誇張や比喩表現の部分的な解釈で終わってしまったては教材の価値は表層的なものになってしまう。そもそも風刺画に描かれた内容は事実と虚構を併せ持ったため、それらを見極めた上で作者のメッセージを読み取っていくことが重要だろう。

問五は、日清戦争後の日本や日本と諸外国との関係を示しているグラフや地図、表の四つの資料を参考に、イギリスが利益を得ることになった下関条約の条項を二つ選択する設問。選択肢自体は正しい内容であり、設問条件をおさえて選択肢と資料の組合せを丁寧に検証していけば正答できる。情報の選択、資料の活用する力を求めている。また、イギリスの側の視点で、日本の動きを捉えるという視点にも注目したい。

第六問

新学習指導要領の日本史探究においては、「時代の転換や展開を捉え、歴史の画期を見いだし現代の日本の課題を歴史的な経緯を踏まえて探究」することがポイントとなる。ここでは、近現代おける時代の転換点に関する三人の生徒の発表をリード文として、歴史的事象の特徴や因果関係を考察する出題だった。それぞれ、日露戦争での日本の勝利、文化の大衆化、一九六〇年代を時代の転換点として挙げている。

問一は夏目漱石についての最も適当な説明を選ぶ知識問題だ

ったが、漱石ほどの高名な小説家でありながら正答率は低かった。文化史における文学に關しての学習が、作家と作品、文学思潮の名称の知識にとどまっていることが多いのかもしれない。

問二は、日露戦争後の日本人の意識の変化に關する二つの捉え方とその根拠として考えられる歴史的な出来事の組合せ問題。第三問の問四と近い設問形式である。

問三は、問六とともに空欄に入る語句ではなく文を選択させる設問で、正答率がこの大問の中で最も低かった。ただ、この結果は設問形式というより、正確にリード文に適合する肢文を捉えられなかったことによると思われる。

問四は、吉野作造の民本主義について、現在の日本国憲法の基本原理と比較したときの時代的な限界を示す言葉の要約を選択させる。民本主義と日本国憲法の理解を前提として、第五問の問五と同様、四つの肢文は内容的には正しく設問条件をおさえて思考・判断する新しい手法である。

問五は、第五問Aの資料と比べて簡略な高度経済成長の因果關係を表したフローチャートの空欄に適当な語句を補充する組合せ問題。問七は、ポツダム宣言と一九四五年の衆議院議員選挙法改正の二択から、転換点として支持する歴史的事象を選びその理由とともに組合せを選ばせる設問で、それぞれの選択によって正答が異なる。前回のプレテストでも出題された設問形

式で、生徒に歴史的評価を問う意欲的な出題である。

おわりに

プレテストの設問から、授業では基本的な知識の習得の上に、歴史的事象の因果關係、歴史的な意義や評価を考察するような学習課題を中心に据えることを求められていることが分かった。その中には、多様な資料を活用し探究した成果をレポートにまとめ発表したり、それらを持ち寄って生徒同士で討論したりする活動が入る。授業者には、歴史の多様な見方を育むため、メリットとデメリット、賛成と反対、主流派と少数派、自国側と相手国側など、比較検討できる資料を提示したり発問の工夫をしたりする必要がある。そのようにして生徒が主体的に学習活動に取り組めてくれば、おのずと生徒の歴史的思考力、さらには歴史観が育まれていくことだろう。

とはいえ、これから現実に大学入学共通テスト、そして新教育課程の「歴史総合」や「日本史探究」が始まるとなると、その対応に筆者を含め不安をお持ちの先生も少なくないだろう。筆者が事務局を務める全国歴史教育研究協議会（全歴研⁴）では、毎年七月下旬に都道府県持ち回りで研究大会を開催している。六〇回目となる今大会は、東京で「新しい歴史教育の創造を目指して」転換期の歴史教育の在り方」と題し、七月二十四日は

四分科会に分かれて歴史総合、日本史探究、世界史探究に向けた実践報告、二十五日は「新しい歴史教育への展望」をテーマに中高大の教員によるシンポジウムを予定している。ぜひ、多くの先生方に大会へ足を運んでいただき、熱心な討議や情報交換の場にしていただければ幸いである。

註

(1) 大学入試センターのHPに試験問題とともに、試験問題の内容、程度、出題方法等についての意見・評価をまとめた試験問題評価委員会報告書が掲載されている。

(2) 一回目のプレテストについては、本誌二六一号にて詳細に分析されているので参照されたい。

(3) 大学入試センターのHPに、問題のねらいや主に問いたる資質・能力とともに、小問正答率が公表されている。

(4) 全歴研は全国の歴史教育研究団体の交流によって歴史教育の発展向上を図ることを目的として昭和三十五年（一九六〇）八月に設立された。以来、毎年一回研究大会を開催し、その成果報告を研究紀要として刊行している。今夏の東京大会の詳細は、全歴研HPをご覧ください。
(<http://www.zenreiken.jp/>、二〇一九年四月一日最終閲覧)

(とよだ・もとひろ／東京都立大江戸高等学校教諭)

日本史用語集

改訂版 A・B共用

全国歴史教育研究協議会＝編

- ・「日本史B」教科書8冊「日本史A」教科書7冊から、約10,700用語を採録。
- ・教科書の改訂を受けて、頻度数を全面改訂。
- ・『詳説日本史 改訂版』をもとに一般的な時代区分・配列とし、授業でも使いやすい。

四六判 本体 860 円（税別） 440 頁
ISBN : 978-4-634-01304-9

